

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育館改築
－埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書－

上ノ山遺跡

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校
伊那市教育委員会

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育館改築

—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

上ノ山遺跡

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校
伊那市教育委員会





1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



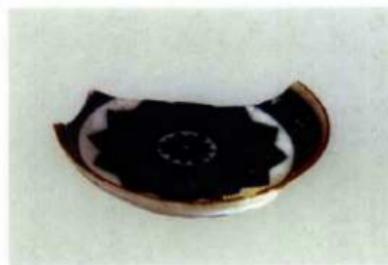
26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55



56

序

本報告書は、平成6年度長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育馆改築に伴う上ノ山遺跡緊急発掘調査の報告書であります。

本遺跡は過去2回にわたって発掘調査が実施され、多大な成果を収めています。最初の調査は昭和43年、グランド造成工事の際に遺構・遺物が検出され、当時、同校教諭であった堀口貞率氏の調査により、明らかにされ、研究雑誌に報告されています。第2回目の調査は平成4年合宿所建設に伴う緊急発掘調査が行われ、平安時代竪穴住居址2軒が検出され、それに付随して土師器、須恵器、灰釉陶器等の遺物が相当量出土し、古代この地における人々の生活舞台がある程度、解明されつつあります。

今回の調査結果については江戸時代中期頃の掘立柱址、太平洋戦争当時の防空壕2基、昭和32年寄宿舎廐舎時のゴミ捨場などが検出され、縄文早期土器片、縄文時代石鎌、江戸時代陶器片、明治時代から昭和時代にかけての多量の磁器、その他、インク瓶、クリーム瓶、硯、絵具皿、錢等々の生活必需品が出土しました。平成7年は太平洋戦争終戦から半世紀を迎えるに当たり、時、あたかも、当時の遺構・遺物の研究がなされたのは感慨深いものであります。

近年、各種の開発事業等の数は増加傾向を指し、それに伴うようにして発掘調査が実施されています。埋蔵文化財の保護につきましては、現状保存が最もこのましい方策ですが、これを導入するには多くの難問題が山積しています。従って、一旦、発掘調査を実施したからには、発掘調査結果を記録保存という形で後世に残しておかなければなりません。

今回の発掘調査におきましては、長野県教育委員会文化課並びに伊那弥生ヶ丘高等学校職員の方々にご指導をいただき、発掘調査団長の友野良一先生を始め、調査員の先生方、作業員のみなさまのご協力により、ここに無事報告書を刊行する運びとなりました。今後、この報告書が教育文化の向上に活用されることを願っております。

平成7年3月2日

伊那市教育委員会

教育長 宮下安人

例　　言

1. 本書は、平成6年度から7年度にわたって実施する長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育馆改築に伴う埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書である。今回の報告は3回目となる。1回目は昭和43年グランド造成時に住居址が発見され「信濃考古第25号」(長野県考古学会刊)に発表されている。2回目は長野県伊那弥生ヶ丘高等学校テニスコートへの合宿所建設に伴なっての緊急発掘調査で、平成5年3月同高等学校、伊那市教育委員会連名のもとに報告書が刊行されている。
2. この緊急発掘調査は長野県伊那弥生ヶ丘高等学校校長の委託により、伊那市教育委員会が市内遺跡発掘調査団を編成し、この調査団に事業を委託して実施した。
3. 本調査は、平成6年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一　飯塚政美　松島信幸　寺平宏

◎図版作製者

 - ・造構及び地形実測図
友野良一　飯塚政美
 - ・遺物実測図
友野良一　飯塚政美　本田秀明

◎写真撮影者

 - ・発掘及び造構
友野良一　飯塚政美
 - ・遺物
友野良一　飯塚政美
5. 本報告書の編集は主として伊那市教育委員会がおこなった。
6. 造構図及び実測図類は伊那市考古資料館に保管してある。

目 次

口 紋 (1~8)

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯.....	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査の組織.....	2
第3節 発掘調査日誌.....	2
第Ⅱ章 遺跡の環境.....	5
第1節 遺跡の位置.....	5
第2節 地形及び地質.....	6
第3節 歴史的環境.....	13
第Ⅲ章 遺構と遺物.....	17
第1節 調査の概要.....	23
第2節 遺構と遺物.....	23
(1) 江戸時代の遺構と遺物.....	23
(2) 昭和時代の遺構と遺物.....	26
(3) その他の遺物.....	31
第Ⅳ章 所見.....	32

擇 図 目 次

第1図 上ノ山遺跡位置図	5
第2図 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校校庭のトレンチ調査柱状図	7
第3図 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校校庭のトレンチ分析結果	9
第4図 小黒原台地の地形学図	11
第5図 小黒原台地周辺遺跡分布図	14
第6図 造構配置図	17
第7図 第1号トレンチ拡張部分断面実測図	19
第8図 第1号トレンチ断面実測図	19
第9図 第5号トレンチ断面実測図	21
第10図 第6号トレンチ断面実測図	21
第11図 第1号柱穴群実測図	付図
第12図 第1号柱穴群断面実測図（その1）	24
第13図 第1号柱穴群断面実測図（その2）	25
第14図 第2号柱穴群実測図	付図
第15図 第2号柱穴群断面実測図	26
第16図 第1号防空壕実測図	27
第17図 第2号防空壕実測図	28
第18図 土器拓影	31
第19図 石錐実測図	31

図 版 目 次

図版1 発掘調査状況	図版5 遺物出土状況
図版2 造構	図版6 出土遺物
図版3 造構	図版7 出土遺物
図版4 造構及び記念撮影	図版8 出土遺物

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

今回改築の対象となった伊那弥生ヶ丘高等学校体育館は昭和35年頃の建造物で、老朽化が目立っていた。この体育馆を平成6年度から7年度にかけて建て替える計画が伊那市教育委員会へ通知されたのは平成6年4月上旬であった。市教委は早速に上ノ山遺跡の対応策を検討すべき、平成6年4月7日付けて長野県教育長宛に埋蔵文化財保護協議依頼を提出する。

平成6年4月18日 伊那弥生ヶ丘高等学校事務室にて長野県教育委員会文化課指導主事、弥生ヶ丘高等学校長、弥生ヶ丘高等学校事務職員2名、伊那市教育委員会社会教育課職員1名で上ノ山遺跡について五者協議を行い、今後に支障のないようにした。この時の協議事項は次のようにあった。

・現体育馆を取り壊した後に、緊急発掘調査を実施して、記録保存措置をとること。従って発掘調査期間を8月中旬から9月30日、調査面積を約2000m²と決める。

・伊那弥生ヶ丘高等学校長と伊那市長とで委託契約をすること。伊那市教育委員会を中心にして発掘調査団を編成すること。調査費用を面積的にみて400万円とすること。

平成6年6月21日付けて、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校長より伊那市長宛に上ノ山遺跡埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託に係る経費の見積書及び発掘調査実施計画書提出依頼がある。

平成6年6月23日付けて、伊那市長から長野県伊那弥生ヶ丘高等学校長へ発掘調査計画書及び発掘調査見積書を提出する。

平成6年6月27日付けて、文化庁長官宛に埋蔵文化財発掘調査の通知について（第98条の2第1項の規定による）を提出する。

平成6年7月18日付けて、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育館改築に伴う埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を長野県伊那弥生ヶ丘高等学校長島田庸夫、伊那市長唐澤茂人間で締結する。

平成6年7月20日付けて、伊那市長唐澤茂人と市内遺跡発掘調査団長友野良一両者で埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書を取りかわす。

平成6年9月30日付けて発掘調査見積書（変更）を島田庸夫長野県伊那弥生ヶ丘高等学校長に提出する。当初経費400万円が180万円に減額されることになった。

平成6年9月30日付けて発掘調査変更委託契約書を伊那市長と伊那弥生ヶ丘高等学校長とで締結を完了する。

平成6年10月6日付けて上記契約書を伊那市長と発掘調査団長とで結ぶ、その後、社会教育課では減額補正を組み、対応処理を実施した。

第2節 調査の組織

緊急発掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委 員 長 小田切 仁

委員長代理 小坂 栄一

委 員 岸 敏子

" 小松 光男

教 育 長 宮下 安人

教育次長 有賀 博行

事 務 局 新井 良二 (社会教育課長)

" 林 俊宏 (社会教育係長)

" 大久保 律子 (青少年教育係長)

" 飯塚 政美 (社会教育係)

" 有賀 恵 (")

発掘調査団

団 長 友野 良一 (日本考古学協会会員)

調査員 飯塚 政美 (")

" 本田 秀明 (長野県考古学会会員)

" 松島 信幸 (第四紀学会会員)

" 寺平 宏 (")

作業員 柴佐一郎 小松 孝臣 小田切 守正 熊谷 久幸

有賀 秀子 大久保 富美子 酒井 とし子 (敬称略 順不同)

第3節 発掘調査日誌

平成6年8月8日 晴 伊那市考古資料館敷地内で発掘器材の整備を行う。

平成6年8月9日 晴 前日と同様な作業を行う。

平成6年8月10日 晴 発掘器材を発掘現場へ運搬する。

平成6年8月11日 晴 前日と同様な作業を行う。

平成6年8月12日 晴 現場にテントを南北に長く2張り建てる。南側のテントは休憩用に、

北側のそれは発掘器材収納用とそれぞれ大別した。北から南へ向って第1号～第9号と命名し、南北に長いトレンチを設定し、作業の都合上、テフラ層までの深さを調査するために重機を用いて2本のトレンチを掘り下げるが、遺物の出土は何も無かった。ただ、ところどころに柱穴が検出されたが、その時代はこの段階では不詳であった。

平成6年8月17日 晴 第3号トレンチ、第4号トレンチを慎重に掘り下げていく。本日も30度を越す暑い一日であり、一雨欲しいような状態で、現場の土層はかわききっていた。

その下層面を掘り下げていくと、柱穴の姿が明瞭になってきた。第5号トレンチ掘り下げを進めていくと柱穴が見えてきた。

平成6年8月18日 晴 昨日に引き続いて第5号トレンチの東側部分を掘っていく。同トレンチ掘り下げ完了後、第6号トレンチ掘り下げに入る。



発掘風景（第5号トレンチ）

平成6年8月19日 晴 最北端の第1号トレンチ発掘開始。掘り下げを進めていくと方形状の柱穴が発見されはじめ、これらは整然と配列されていた。掘り込み面はかなり安定していたが、いつの時期かは判然としなかった。第3号トレンチのセクション図と平面図完成。本日の出土遺物は細片の土器（時期不詳）1点、黒曜石製石錐1点であった。

平成6年8月23日 晴 第5・6号トレンチ内に柱穴が検出されており、これらの土層埋没状況を精査し、実測するために柱穴ごとにセクションを残しておく。第5号トレンチ北側を通じるセクションを実測するように壁面をきれいにする。前述した両トレンチの西側に南北にかけて搅乱土の落ち込みが見られ、掘り下げていくと各種の状態からして戦時中構築された防空壕のように想定できた。本日より作業員におばさん達が参加し、にぎやかになった。

平成6年8月24日 晴 第5号トレンチ通しセクション図を作製する。同トレンチ内検出の柱穴それぞれのセクション図作製終了。第1号トレンチ内の柱穴を、1つ、1つセクションを残して掘り下げる。第1号トレンチ北側通しセクションをとれるよう清掃をする。第1号トレンチ東側の一角に赤土を混合した搅乱土が検出され、これは固くしまって帶状にはっきりとみえた。掘り下げていくと、これは昨日精査した防空壕のような遺構となつた。昨日のを第1号防空壕、本日のを第2号防空壕と名を付け、判別した。

平成6年8月25日 晴 第5号トレンチ内検出の柱穴を全て掘り下げる。第1号トレンチ、第3号トレンチ、第5号トレンチ、第6号トレンチ、第7号トレンチ、第8号トレンチを清掃し、写真撮影を終える。第5号トレンチ内検出柱穴群の広がりを確認するため、同トレンチの

北側を拡張して精査してみると、ところどころに一定の配列をもった柱穴が発見された。

平成6年8月26日 晴 第5号トレンチの北側から検出された多くの柱穴のプランを確認する。これらは大部分方形状を呈していた。柱穴1つ、1つの土層断面図を作製する。

平成6年8月29日 晴 8月26日に土層断面図を作製した柱穴、1つ、1つを完掘する。完掘後、ただちに柱穴群の平面実測を開始する。第1号防空壕周辺を拡張し、プラン確認後、掘り下げを進めていく。床面上に南北に細長く、南壁、北壁直下に7本の柱穴が等間隔で配列されていた。

平成6年8月30日 晴 第1号トレンチを中心にして点在する柱穴の範囲確認に努める。これらの断面カットを続行する。

平成6年8月31日 晴 第5号トレンチ周辺から検出された柱穴群の平面実測をする。第1号トレンチ北側で検出された柱穴1つ、1つの土層セクションを測定する。第2号防空壕の完掘。地層調査のため、大きな試掘溝を掘る。

平成6年9月1日 晴 第5号トレンチ周辺の柱穴群を平面実測する。第1号トレンチ北側拡張部分の東西断面図を作製。

平成6年9月2日 晴 昨日同様、柱穴群と第1号防空壕の平面実測をする。

平成6年9月6日 晴 第1号トレンチ周辺の柱穴群・第2号防空壕の平面実測を済せる。

平成6年9月7日 晴 2つの柱穴群、2つの防空壕断面実測を終える。

平成6年9月8日 晴 全測図の作製、現場説明会を午前11時と、午後1時30分の2回に分けて実施すると、伊那弥生ヶ丘高校生、伊那中学校生徒、一般者多数の見学があった。

平成6年9月9日 晴 午前中は検出された全ての遺構の写真撮影をする。午後、発掘器材のあとかたづけを全員で行い、考古資料館へ運搬する。午後2時頃からブルートーザーにて埋め戻しをして原形復旧の姿にもどした。

平成6年9月12日～9月14日 現場の最終的なあとかたづけをする。

平成6年9月～平成7年2月 図面の整理、原稿執筆、報告書の編集、報告書を印刷所へ入れる。

平成6年3月 報告書を刊行する。

最後に、発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げる次第であります。

(飯塚政美)



現地説明会開催（平成6年9月8日実施）

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

上ノ山遺跡は、長野県伊那市西町区伊那部にある長野県伊那弥生ヶ丘高等学校敷地内にその範囲を有している。遺跡地までの道順はJR飯田線伊那市駅で降り、駅前の道路を西へ200m位行った四角を左折し、西駒ヶ岳線を南へ150m程行くと三叉路に出会う。このところで右折して坂道を登って西へ向う。すこし登って行くと左手に天台宗円福寺、右手に荒井神社が莊嚴なたたずまいを呈している。荒井神社前の三叉路を左手に取るとすぐに伊那健康センターが目に写



第1図 上ノ山遺跡の位置図

る。これを左手に見て、わずかな公配を登りつめると、同じ側に長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育館が建っている。この北隣りが今回緊急発掘調査を実施した地点であり、いわば上ノ山遺跡の最北端部に該当すると思われる。高校の所在地は北緯35度50分8秒、東経137度57分10秒、標高682mをそれぞれ測定できる。

(飯塚政美)

第2節 地形及び地質

伊那市は天竜川に沿う沖積低地に国道153号線やJR飯田線がとおり、これらに沿って商店街が並び上伊那北部の中心的な市街地を構成している。市街地のすぐ西側には台地状の丘が連なっている。丘の上に長野県伊那弥生ヶ丘高等学校や春日城址公園があって、市街地を見下ろす高台になっている。高台と市街地との標高差は約40mである。

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校は扇状地の上にある

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校や隣接する伊那市立伊那中学校のある台地は中央アルプスから流れ出てきている小黒川や小沢川によってつくられた扇状地の上にある。この扇状地がつくれられていた大昔は、今のような高台になっていたなかった。小黒川や小沢川はもちろん、天竜川もだいたい同じくらいのところを流れていたのである。したがって、すぐ近くの小沢川に洪水がおこれば伊那中から弥生ヶ丘高校付近まで水つきになっていたはずである。扇状地という地形は山から流れ下ってくる支流が、大洪水のたび、平坦部に氾濫することをくり返すことによってでき上がってきた地形である。あるとき、何らかの変化がおきて小沢川の氾濫が弥生ヶ丘高校のところまでこなくなる。もちろん、天竜川や三峰川の氾濫もやってこなくなるときがある。こうなったとき初めて扇状地の形ができ上がる。

このように、扇状地のできあがる過程で、洪水がやってこなくなる現象を離水といふ。また、離水した時期を離水期といふ。ここで、問題にしなければならないことは、弥生ヶ丘高校の扇状地の離水期はいつかという問題と、なぜ離水するようになったかという原因についてである。

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校の扇状地の離水期について

弥生ヶ丘高校の敷地内に古代人の遺跡があった。これを上ノ山遺跡といふ。調査結果では平安期の住居址があり、さらに、土師器や縄文中期の土器が出土している。このことから一番古い縄文中期（約4000年前ころ）には完全に離水していたはずである。いやいや、もっと古い時代から離水していて、縄文中期のころには、現在と同じように天竜川を眼下に見下ろす高台になっていたかもしれない。

離水期をはっきりさせるためには人類の遺物よりもっと古いところまでさかのばって調べてみなければならない。こうした目的のため、弥生ヶ丘高校の敷地をつくっている表層の地層について調査を行った。敷地の表層には黒土と赤土がある。赤土の方が下にあるから、赤土の方が黒土より先に堆積した地層である。したがって、赤土から離水期の年代を得る手がかりが

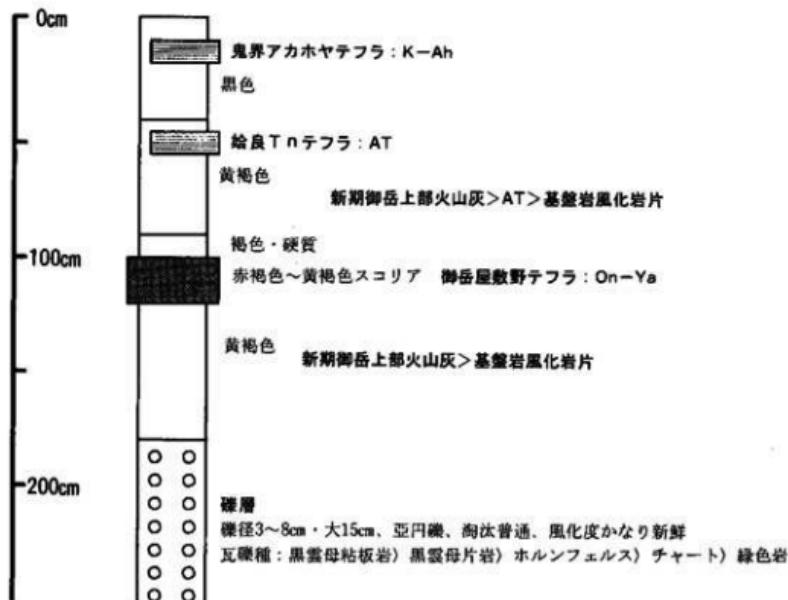
あるはずである。

遺跡調査に際し、赤土の調査もおこなった、トレンチ調査といって、下から疊層が出てくるまで穴を掘って赤土を調べた。

長野県伊那弥生ヶ丘高等学校のトレンチ調査結果

弥生ヶ丘高校の調査結果を第2図に示す。この図は黒土・赤土・疊層の地層断面を示している。扇状地をつくっている疊層が地表から180cm下からあらわれてくるので疊層の上に赤土などが180cmの厚さで堆積していることを示す。180cm下のところが離水期にあたる。180cmの赤土などの地層は離水した後に堆積した地層であり、扇状地疊層を被覆した地層である。厚さ180cmの被覆層の一一番下位が、何万年前の地層であるかわかれれば、それが離水期になる。この年代は約5万年前となる。

5万年前という年代値は100~120cmの深さから検出される御岳屋敷野テフラ（以下On-Yaと記す）によって決定される。On-Yaは御岳三岳テフラ（以下On-Mtと記す）の上位に重なるスコリア層であることがわかつており、On-Mtの年代値が5万4千年前（中村、1994）と測定されているため、これより上位に重なるところから約5万年前と推定した。



第2図 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校校庭のトレンチ調査柱状図

120~180cmの地層は黄褐色の火山灰質層である。この地層の鉱物組成は第3図に示す。大半は新期御岳上部テフラ層にあたる火山起源の鉱物および火山岩片である。しそ輝石がもっとも多く、統いて磁鉄鉱・普通輝石である。岩片中には黒色コーカス状岩片が多い。御岳火山起源でない粒子は140cmくらいから下位に目立ちはじめ、160cmになると15%の非火山岩片が混入している。非火山岩片は当時の小沢川や小黒川の砂粒であり、風で飛ばされてきたものが御岳の火山灰と混じり合って堆積したものである。180cmの黒灰色の砂は扇状地の疊層の基質部分の砂である。

On-Yaは赤褐色~黄褐色スコリア粒で特徴づけられるテフラ層で、黒色のコーカス状岩片が入ってくるため、まわりの火山灰質層よりやや固結度がよい。鏡下では黒曜石が検出される。90~100cmの部分はOn-Yaに由来する黒色コーカス状岩片を含み、全体に硬くしまっている。

80cmより上位の火山灰質層は黄褐色の新期御岳火山灰層で、120cmより下位の火山灰層と比較したとき、全体がやわらかいので“ソフトローム”と呼ばれることもある。さらに、80cmより上位には火山ガラスが数%から10%ほど混じっている。

火山ガラスは南九州の姶良カルデラを起源とするもので姶良Tnテフラ（以下ATと記す）と呼ばれている。ATは広域テフラとも呼ばれ、本州全域に分布する火山灰で、この年代が2万5千年前（村山ほか、1994）とされており、地層の年代を決定するのに大変役に立つ火山灰である。年代の決め手として使われることから指標テフラという。

ATは50cmのところにやや含まれている。しかし、0~80cmまで10%前後の火山ガラスが混入している。このことはATの降下後、80cmまでの間の火山灰層が何らかのはたらきで攪拌されていることを示している。AT降下期の2万5千年前ころは最終氷期におけるもっとも寒冷な期間にあたるため、凍結融解作用による搅拌があり、さらに、乾季の風で二次的に風送され、再堆積したものと考えている。ATが成層状態で産出する露頭では表層の黒土層直下にあたる褐色土中にはさまれる。こうした事例を参考にすると、弥生ヶ丘高校の露頭でAT火山ガラスが多い40~50cm付近がATの層準と推定できる。

40cm以上は黒土となり、この中の火山ガラスには鬼界アカホヤテフラ（以下K-Ahと記す）が含まれてくる。K-Ah火山ガラスには褐色ガラスが含まれているので、20cm付近をK-Ahの層準と推定できる。K-Ahの年代は6300年前であることから、黒土層は縄文時代の堆積層にあたる。長野県伊那弥生ヶ丘高等学校のある扇状地が離水するに至った背景

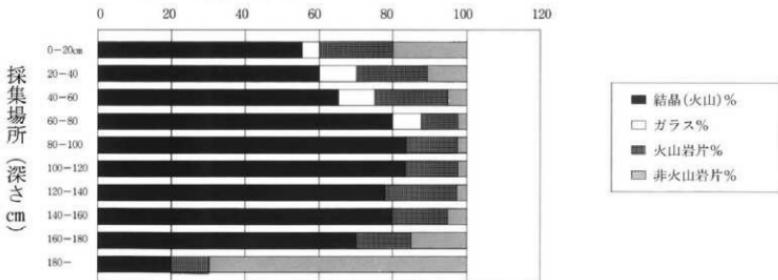
伊那弥生ヶ丘高校の位置する扇状地は小黒原扇状地の扇端にあたる。この扇状地は小黒川と小沢川によってつくられたものである。

小黒原扇状地は扇端から離水しはじめている。弥生ヶ丘高校の調査地点では第2図に示したように御岳屋敷野テフラが被覆している。ところが、伊那文化会館から小黒原の一部ではOn-Yaより上位の火山灰層が疊層を覆っている。On-Yaは検出されない。On-Yaの降下期である約5万年前ころはまだ離水していない。小黒原扇状地の大部分は5万年前よりもっとあとで離水し

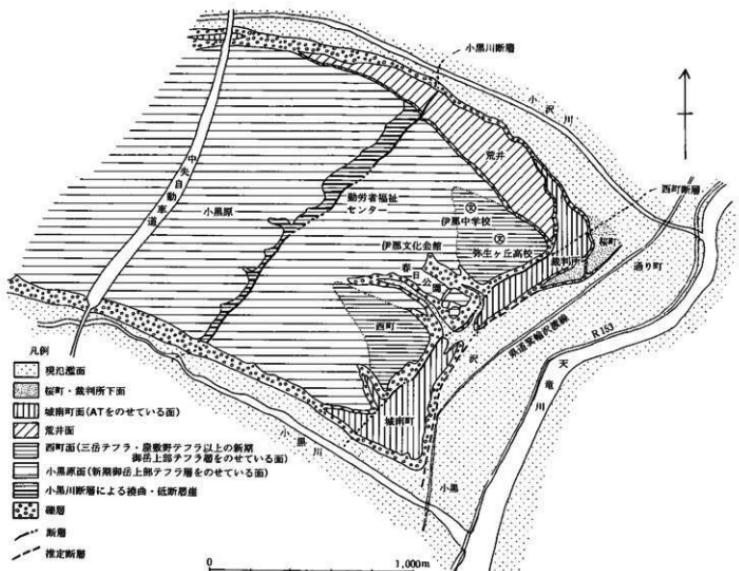
採集場所	野外での特徴	結晶(火山)%	ガラス%	火山岩片%	非火山岩片%	主な鉱物	の形態	特徴・その他	メモ
0~20cm	黒色	55	5	20	20	fl: hy: qz: mg: au: ho: bi	bw	御岳火山灰(風化岩片)	AT, K-Ah
20~40	黒褐色	60	10	20	10	fl: hy: mg: qz: au: ho (bi)	bw	褐色ガラスを含む	御岳火山灰(風化岩片)AT, K-Ah
40~60	黄褐色	65	10	20	5	hy: fl: mg: au (bi, qz)	bw	御岳火山灰	AT: 風化岩片
60~80	黄褐色	80	8	10	2	hy: fl: mg: au: qz (bi, ho)	bw	御岳火山灰	AT: 風化岩片
80~100	黄褐色	83	1	15	2	hy: mg: fl: au: qz (ho)	bw	黒色コーカス状岩片含む	御岳火山灰
100~120	赤褐色スコリア混入	83	1	15	2	hy: mg: fl: au: qz (ho, ob)	bw	黒色コーカス状岩片含む	御岳絶滅野テフラ On-Ya
120~140	黄褐色	77	0	20	3	hy: mg: fl: au: qz (ho)	bw	黒色コーカス状岩片含む	御岳火山灰
140~160	黄褐色	80	0	15	5	hy: mg: fl: au: qz (ho)	bw	黒色コーカス状岩片含む	御岳火山灰(非火山岩片)
160~180	黄褐色	70	0	15	15	hy: mg: fl: au: qz (ho)	bw	黒色コーカス状岩片含む	御岳火山灰(非火山岩片)
180~	黒灰色、礫層のマトリックス	20	0	10	70	hy: au: ho: mg: ol	bw	黒雲母粘板岩の粒多い	小黒川、小沢川の砂

鉱物名		火山ガラスの形態	
hy	: し:輝石	mu	: 白雲母
au	: 普通輝石	fl	: バブル型
ho	: 角閃石	qz	: 石英
mg	: 磁鐵鉄	zi	: ジルコン
ol	: あんらん石	ob	: 黒曜石
bi	: 黑雲母	pm	: 軸石型

砂粒の成分比(%)



第3図 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校校庭のトレンド分析結果



第4図 小黒原台地の地形学図

ている。

小黒原扇状地は扇端が最初に離水し、扇状地面の全体は扇端より遅れて離水している。なぜ、こんなことが起きたかといえば、弥生ヶ丘高校の東側に西町断層ができ、断層に沿って隆起したからである。西町断層は弥生ヶ丘高校東側の崖、春日城址公園東側の崖、城南町の崖をつくった断層である。伊那市の市街地を下町とすれば、弥生ヶ丘高校・伊那中学校・春日城址公園などは一段と高い高台を作っている。高台をつくっている崖は天竜川の侵食によってできた段丘崖のように見えるが、その成因は西町断層による橿曲崖である。ただし崖ができたあとで、天竜川による侵食が少し加わっている。橿曲崖の北への延長は伊那小学校東側の崖、伊那北高校東側の崖となり、御園へとのびている。城南町の住宅地において、西町断層の露頭の一部が観察でき、そこでの観察結果から断層は5.4万年前から5.1万年前ころの間に発生したことがわかった。断層の発生と、弥生ヶ丘高校台地の離水期とは一致している。

小黒原扇状地が台地になっていく過程

伊那弥生ヶ丘高校は天竜川沿いの市街地より約40m高い台地になっている。小黒原扇状地の台地への第一歩は西町断層の発生である。この断層は西側隆起のため、小黒原の扇端が切れ、西町断層に沿う西側が隆起をはじめる。隆起と同時に小沢川による扇状地の掘り込み作用がはじまり、弥生ヶ丘高校一帯が最初に離水して西町面（第4図参照）をつくる。

5万年前から4万年前にかけては小黒原扇状地の隆起は全域へ拡大し、扇状地全体が離水する。その後、さらに隆起が進み、隆起と共に、小黒川と小沢川は小黒原扇状地を侵食していく。侵食していく途中で荒井面がつくられる。荒井面のような地形は扇状地開析段丘（略して扇状地段丘ともいう）と呼ばれる。荒井面は約3万年くらい前の段丘面にあたる。さらに侵食が進んで城南町面ができた。この面はAT火山ガラスをのせているので2.5万年前くらいにできた段丘面である。

城南町面ができたあと、さらに小黒川や小沢川の掘り込み作用が早くなり、下町にある小沢川沿いの室町・元町・通り町などの沖積低位面がつくられていき、現在のような地形ができるあがつた。

（松島信幸 寺平宏）

第3節 歴史的環境

権兵衛岬付近に源流を有する小沢川と、木曾山脈の主峰の一つである将棋頭山より流れ出す小黒川とで南北に挟まれた一帯は通称小黒原台地と呼ばれ、市民に周知されている。この範囲内には埋蔵文化財包蔵地所謂遺跡が現在確認されているだけで27ヵ所を数える。遺跡の分布状況は第5図小黒原台地周辺遺跡分布図を概観して頂ければ一目瞭然であるが、おおむね三つのパターンに分類が可能かと判別でき得よう。

そのうち一つは山麓扇状地の扇頂部や扇頭部に展開する遺跡群、もう一つは扇状地の扇端部

と段丘面上にある遺跡群、さらには一つは小黒川や小沢川両河岸段丘面上に沿って細長く点在する遺跡群である。これらを結論的に見れば湧水関係に左右された姿であろう。第5図小黒原台地周辺遺跡分布図に基づいてみれば、現在、27ヵ所の遺跡の存在が確認されており、時期別集計内訳は次の通りとなる。

旧石器2、縄文早期2、縄文前期7、縄文中期2、縄文後期4、縄文晩期2、弥生前期1、弥生中期1、弥生後期3、古墳3、奈良・平安時代の土器類を出土したもの10、奈良・平安時代の須恵器を出土したもの12、灰釉陶器を出土したもの12、中世陶磁器を出したもの6、近世陶磁器を出したもの5である。

今まで何んらかの動機で発掘調査を実施した遺跡は次の通りであり、検出された遺構と遺物を記す。遺物に関しては土器、陶磁器だけにとどめ、編年によって述べていく。

5の八人塚遺跡（縄文中期初頭竪穴住居址4軒 縄文中期後葉竪穴住居址3軒 縄文中期土壙7基 土器編年では梨久保式 平出3A式 薩内式 井戸尻式。6のおぐし沢遺跡（平安時



第5図 小黒原台地周辺遺跡分布図(1:50,000)

- 1上ノ山 2北方 3矢塚畠 4闇畑 5八人塚 6おぐし沢 7丸山清水 8穴沢
9ますみヶ丘上 10船塹 11船塹西 12ねずみ平2 13ねずみ平1 14上手原 15城畠
16小沢原 17赤坂 18ますみが丘 19城楽 20伊勢並 21八人塚古墳 22狐塚南古墳跡
23狐塚北古墳 24山の神 25富士塚 26小黒南原 27ウグイス原団地

代竪穴住居址 1軒 土器編年では茅山上層式 藤内式 井戸尻式 曾利式 土師器 灰釉陶器 内耳土器)。

7の丸山清水遺跡(縄文中期初頭竪穴住居址 2軒 縄文中期中葉竪穴住居址 1軒 縄文中期後葉竪穴住居址 17軒 縄文中期土壙 17基 平安時代竪穴住居址 3軒 土器編年では梨久保式 平出 3 A式 藤内式 井戸尻式 曾利式 土師器 須恵器 灰釉陶器)。10の船塗西遺跡(近世末期溝状遺構 梨久保式 井戸尻式 曾利式 称各寺式 近世磁器)。11の船塗西遺跡は平成 4年 3月実施された分布調査によって新たに発見された遺跡である。分布調査によれば平安時代竪穴式住居址 2軒 梨久保式 井戸尻式 曾利式 灰釉陶器 緑釉陶器の検出を見た。特殊な遺物として弥生後期の磨製石鎌が 1点伴出している。

15の城畠遺跡(遺構の検出は無し、土器編年では諸磯 b式 大歳山式 十三菩提式 船元式 梨久保式 下小野式 井戸尻式 曾利式 堀ノ内式)。16の小沢原遺跡(弥生前期土壙 3基 中世末期頃の炉址・井戸址 土器編年として大歳山式 十三菩提式 北白川下層 III C式 曾利式 大洞 A式 水神平式、中世陶磁器として古瀬戸天目茶碗 古瀬戸灰釉碗 近世陶磁器として有田焼藍色染付茶碗 瀬戸鉄釉器鉢)。

17の赤坂遺跡(縄文中期土壙 1基 時期不詳土壙 3基、土器編年として木島式 梨久保式) 18のますみが丘遺跡(時期不詳溝状 1基)。19の城樂遺跡(縄文前期末葉土壙 1基 縄文後期土壙 1基 時期不詳土壙 2基 時期不詳マウンド 1基 近世原田旧井址の一部分 時期不詳の溝状址 3基 太平洋戦争時の竪穴 3基 土器編年として縄文早期横円押型文 下島式)。20の伊勢並遺跡は過去 2 回にわたって発掘調査を実施している。第一次調査は昭和 38 年、第二次調査は平成 3 年であった。調査の結果、縄文中期住居址、縄文早期土器片が発見され、早期土器片のなかには東海・関東地方のものが含まれており、東西文化交流という問題で注目されている。今後資料増加を期待する。

21の八人塚古墳は昭和 16 年に塙原伝氏によって調査され、その報告が考古学雑誌 8-9 に掲載されている。長さ 6m、幅 1.2m、高さ 1.2m を持つ横穴式石室で、円墳を呈す。太刀 2、刀子 3、鉄鎌・槍 3、菅玉 2、小玉 2、和鏡 1 を出土している。氏は以上の成果をふまえて、築造年代を 8 世紀末頃との考察を加筆している。22の狐塚南古墳は昭和 50 年 4 月～5 月にかけて発掘調査を実施し、その結果を記す。横穴式石室を有する円墳で、底面は河原石を亀腹状に敷き詰めて、石室の形態を整備してあった。土師器、須恵器、金環、銀環、刀子、馬具等々が出土した。なかでも杏葉 3 枚は銅製下地に金張りをした優品で、朝鮮からの渡来品であり、現在、伊那市有形文化財考古資料に指定されている。

上ノ山遺跡周辺には、宝樹山蓮華院円福寺、種月山長桂寺、荒井神社、春日神社等の神社、仏閣が存在し、これらの由来、伝承からみても古代後半から中世にかけてはなばなしく歴史の表舞台に登場した地域と想定できよう。なかでも、伊那市民に最も親しまれている春日城址は本遺跡より沢を隔てた南側に位置し、同城址公園内に建てられた記念碑にはその沿革について

書かれているが、その内容については長野県伊那弥生ヶ丘高等学校合宿所建設事業－上ノ山遺跡－埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 平成5年3月発刊』を参照して下さい。

本遺跡の発掘調査は今回のを除いて過去2回にわたって実施され、第一次調査は堤口貞幸氏が『信濃考古第25号』に報告している。第二次調査については前述した報告書にそれぞれ詳細に記述されているので御参考にして下さい。

近世に入る直前（天正19年）に豊臣秀吉が全国的に検地を実施し、これを太閤検地とか青表紙縄帳とか呼ばれ、江戸時代に入って5回も実施される検地の草分け的存在となった。この縄帳に「伊那辺本郷」の名が見受けられ、当時16軒の町並が構成されていたことがわかる。

上ノ山遺跡周辺は江戸時代に西伊奈部村と呼ばれ、一つの農村集落形態を成していた。徳川幕藩体制強化のために寛永検地（寛永16年11月施行）、慶安検地（慶安2年丑ノ霜月施行）、明暦検地（明暦二丙申年施行）、寛文検地（寛文19庚戌年3月～同11辛亥年施行）、元禄検地（元禄3年庚午年九月施行）が実施されたわけであるが、これらに関連したことで西伊奈部村に付随することを記しておく。

寛永検地－寛永16年西伊奈部村の検地帳は2冊現存しており、天正19年の西伊奈部村と比較して、筆数が前者のものより337筆少ない。

慶安検地－主に西伊奈部村の内、小沢・平沢方面で実施された。

明暦検地－西伊奈部村では現在のところ、この検地帳は発見されていない。

寛文検地－西伊奈部村の内、小沢村で部分的に実施された。

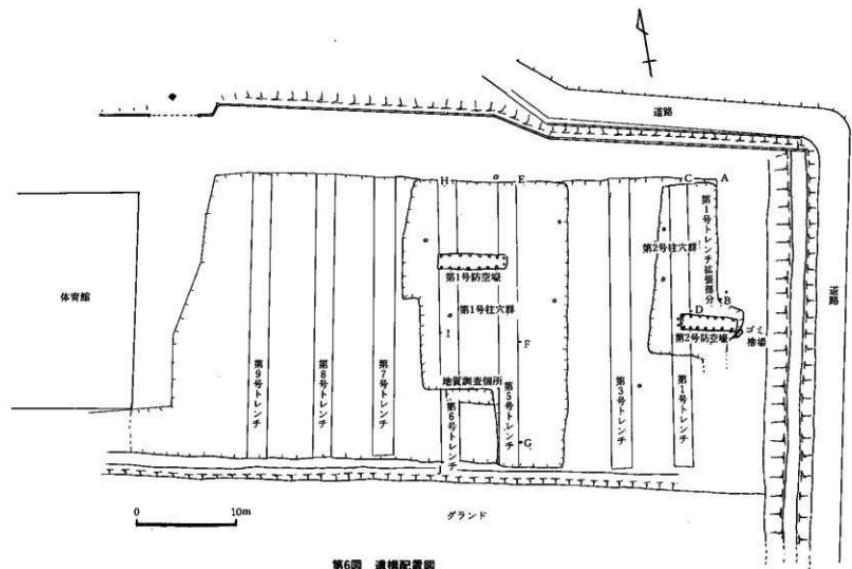
元禄検地－元禄3年の石高は次のようにある。一、高千式拾五石九斗式升七合、信濃国伊那郡西伊奈部村、前記の石高は、西伊奈部村が分村しない前のため、荒井、西町、小沢、平沢、横山の合計である。西伊奈部村に配布された検地帳は6分冊になっている。

次に本遺跡周辺に現存している塚について触れておくことにする。

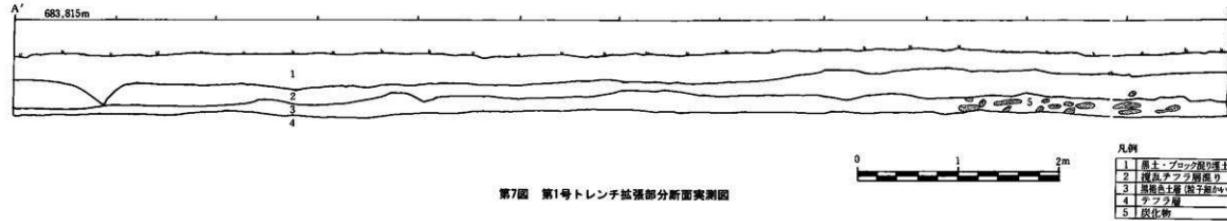
富士塚－小黒原台地の東端部、市営総合運動場の西に隣接しており、円墳状に土盛りをして築いてある。昭和27年～30年にかけて、この塚周辺70余町歩の土地改良事業を実施した。この際、荒井区の旧跡として後世に残すことになった。元禄3年高遠領惣検地の時、使用した測量用消耗品は検地終了後、ここに埋納したと伝承されている。

本遺跡地の周辺小字には古蓮台 堂ノ上 大芦畑 上原 町裏 町 御射山、城 大手 供養場 荒畑 道下 大道下 清水等が現存しており歴史的に興味深い。 (飯塚政美)

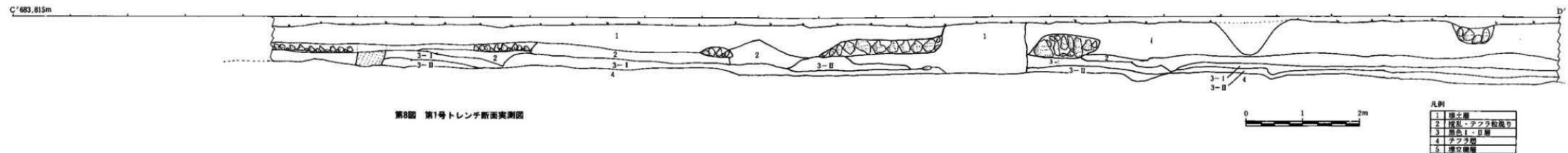
第III章 遺構と遺物



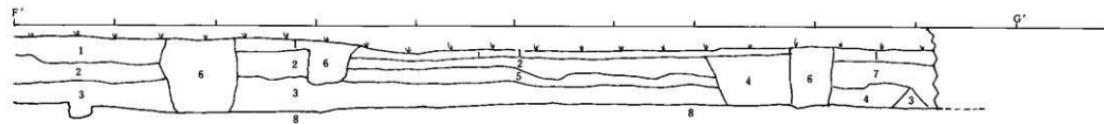
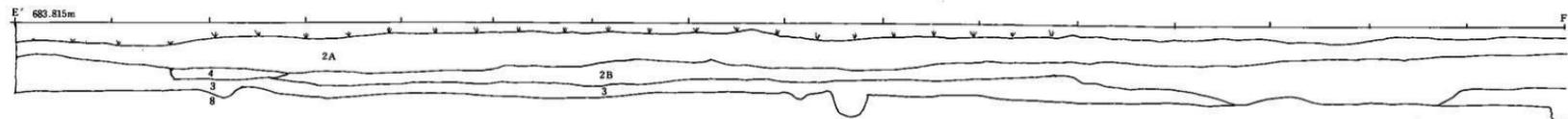
第6図 遺構配置図



第7図 第1号トレンチ拡張部分断面実測図

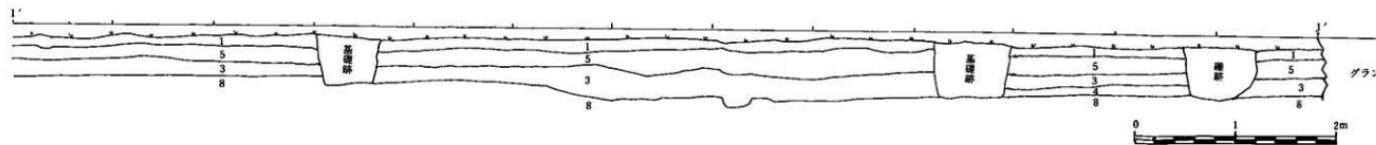
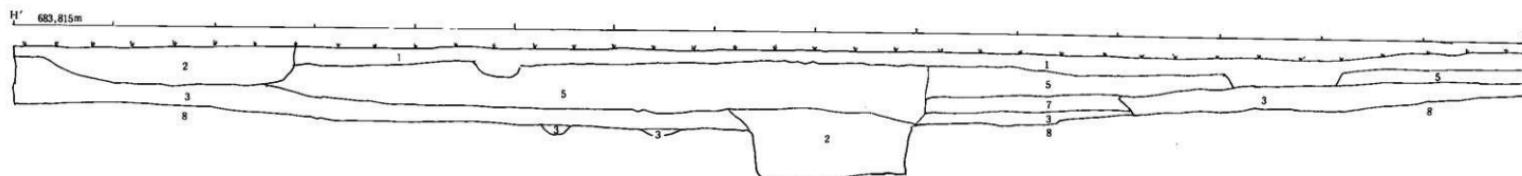


第8図 第1号トレンチ断面実測図



凡例
1 砂利層
2 黒褐色土フラ(Al) ブロック複数
3 黒色土層
4 黑褐色土層
5 黒褐色土フラブロック複数
6 黑褐色土フラブロック複数
7 黑褐色土フラブロック複数
8 テフラ層

第9図 第5号トレンチ断面実測図



凡例
1 砂利層
2 黒褐色土フラブロック複数
3 黒色土層
4 黑褐色土層
5 黒褐色土フラブロック複数
6 黑褐色土フラブロック複数
7 黑褐色土フラブロック複数
8 テフラ層

第10図 第6号トレンチ断面実測図

第1節 調査の概要

上ノ山遺跡は現在、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校敷地内にあり、第II章、第3節に前述してあるように、過去、2次にわたる発掘調査を実施している。今回の発掘調査の直接的動機は体育館の改築に伴う調査であり、調査に着手する前に以前の建築物による土層の破壊が進んでいるものと懸念していた。

本調査の対象となった地区は昭和30年代前半頃に建築された体育館の下（面積約2000m²）であった。調査を開始してみると、何回か造成されたとみて、土の移動が極めて多かった。重機による掘り下げをトレンチ状に進めしていくと、それぞれのセクションに埋土と擾乱土の堆積が各所に確認でき、調査を進めていくうちに難渋した。

調査の結果、江戸時代の柱穴群2基、昭和時代（太平洋戦争時）の防空壕2基、昭和30年代前半寄宿舎廃絶時のゴミ捨場1基の検出をみた。

遺物に関しては縄文早期後葉茅山式土器片1片、縄文時代石錐2点、江戸時代陶器片2点、明治時代から昭和時代にかけて寄宿舎で使用した日常生活必需品多数が出土した。日常生活必需品の主なものは御飯茶碗、湯呑茶碗、醤油差し、クリーム瓶、インク瓶、硯等々であった。

第2節 遺構と遺物

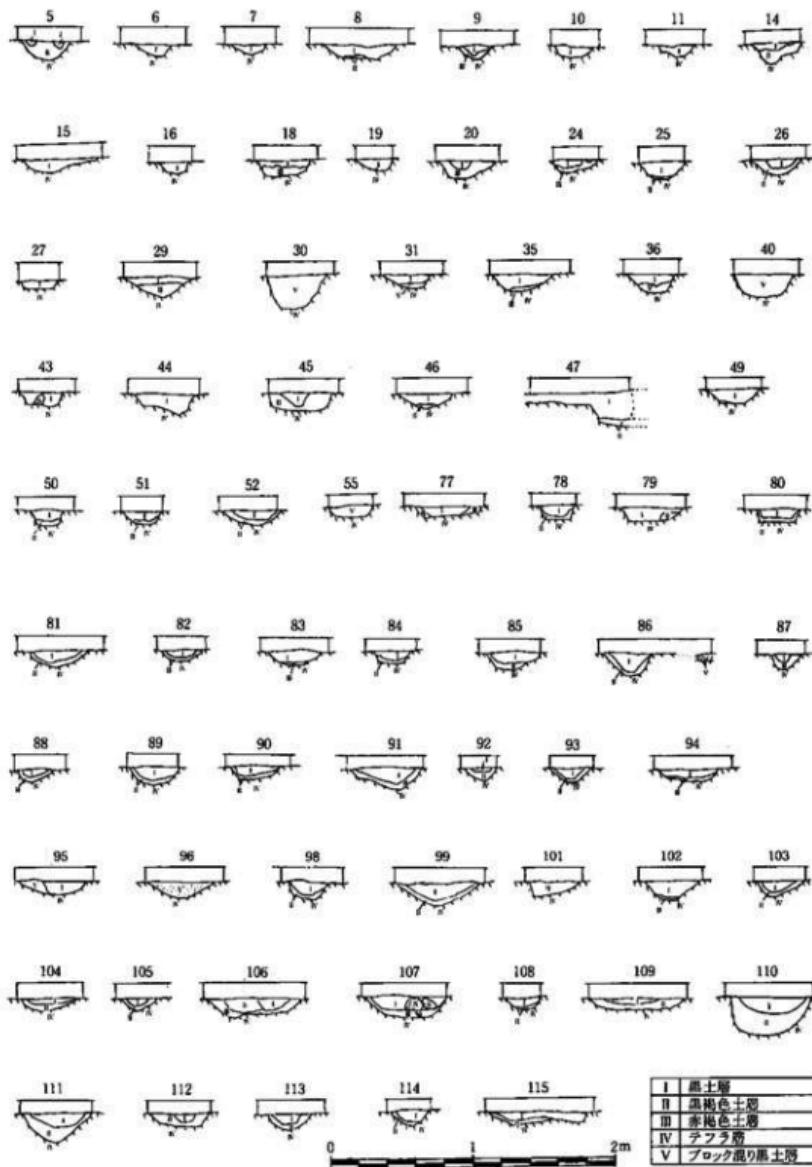
(1) 江戸時代の遺構と遺物

第1号柱穴群（第11～13図 図版2）

本柱穴群は、今回の発掘調査された体育館建設敷地内では、中央部より東側に当る位置に分布していることを確認することができた。この柱穴群の旧地形は、調査の結果から復元して見ると、調査されたトレンチの断面から、地層の上層部は敷砂利と造成中に埋め立てられた土層があり、その下層に古い黒色土層が認められた。この事実は、弥生ヶ丘高校が建設される時点で、西側の高かった場所を切り取ってこの黒色土層の上部に、埋立てたものであることを知ることができ、今回の調査ではこの古い黒色土層を基準としてその上下の遺構の有り方を詳細に調査した。江戸時代中期頃と推定される陶器菊皿片と灰釉陶器片出土（口絵8 55 56）

1) 今回調査された柱穴群は、南側に所在するそれを第1号柱穴群とした。その北側に設けられたトレンチを隔てて検出された柱穴群を第2号柱穴群とした。第1号柱穴群の面積は178平方米を測る。この柱穴群は、柱穴の大小の差や柱穴間の間隔の不揃いから、一時期に設けられたものではないようであると考えられる。また、第2号柱穴群との間には、かつての建物の基礎工事のため破壊されていて柱穴の存在を知ることは出来なかった。第2号柱穴群の北側は用地外のため、その広さを知ることが出来ない。第2号柱穴群の面積は31.17平方米と少なかった。

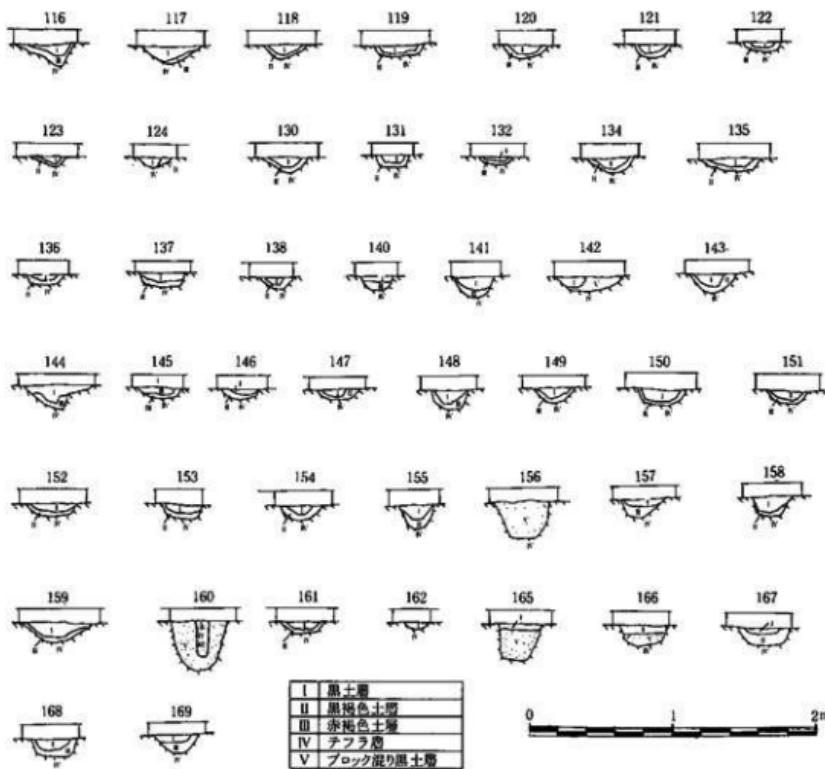
2) これら掘立建物は第1号柱穴群においては第1～3号の3棟が存在したものと考えられ、そのうち第1号掘立建物址は桁行9m、梁間4.5mで、面積は40.5m²の建物址と考えられる。



第12図 第1号柱穴断面実測図（その1）

この建物の柱間は東柱を含む間隔は90cm~1.0m内外である。今回の調査で、四隅は掘立柱であると思われるが、その中间の間柱は区別することが出来なかった。本址の柱穴址は54個を数えた。第2号掘立建物址は、第1号防空壕の北側に認められた。建物の規模は桁行5.6m、梁間4.7m、面積26.3m²の建物址と考えられる。第3号掘立建物址は第1号防空壕の西側に設けられているが、規模は南北で9.1m、東西2.9mと狭いが、西側の約半分が工事で破壊されているので、建物の全体を知ることができなかつた。この3棟の外にも柱穴が認められるので、他にも建物が存在した可能性も考えられる。

これらの建物址の基礎となる基盤から構造物を考えて見ると、当時の地層は、地表面下20~30cmは古い黒土層と考えられることから、この層の下部は黒褐色土層から赤褐色土層になっている。これらの層に10~20cm掘り込まれて柱穴址が存在しているので、柱はこれらの層50~60cmの深さに掘り込んで作られたものと想定される。



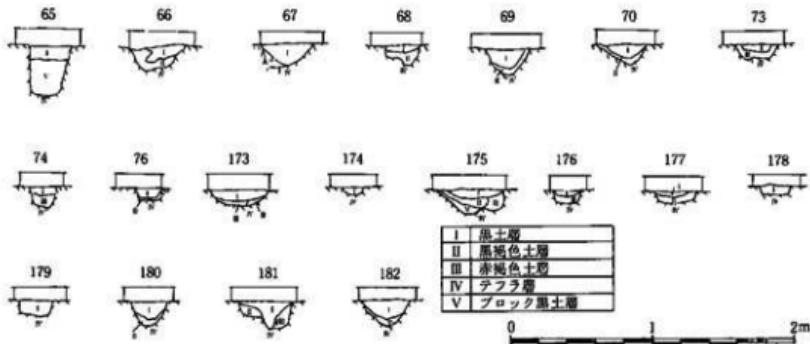
第13図 第1号柱穴群断面実測図(その2)

第2号柱穴群（第14～15図 図版2）

本柱穴群は、調査区域としては、東側第1号トレンチ内に発見された柱穴群である。この柱穴址の北側には柱穴址が認められないので、北側にはこの辺が限界ではないかと考えられる。また、東側では用地外となるので今回は調査できなかったので、柱穴址の存在は知ることはできなかった。また、南側では古い建物の基礎で破壊されていて、柱穴址は確認することはできなかった。東側では第2号防空壕で柱穴は認めるることはできなかった。本柱穴群の規模は南北の桁行で3.6m、東西の梁間は2.7mを測る。面積は9.7m²と小規模の建物址であったと考えられる。

これらの掘立建物址の下部構造は第1号柱穴群の項で述べたので、ここでは、上部構造について推定ではあるが、復原して参考にしたい。柱は掘立柱による構造と考えられるところから、一般的には高床による建物と、平床式の建物であったのではないかと考えられる。現在、当建物址の時期は江戸時代ではないかと考えられているところから、この付近には古い神社や寺院などが存在することから、この地方の郷倉が設けられたのではないかと言う郷土史家の意見も聞かれる。今回の調査では、一部に柱の腐蝕した所が認められた外は、建物の構造についての資料は確認することはできなかったので、皆様方の御教示賜わり参考にしたいと存じております。

（友野良一）



第15図 第2号柱穴群断面実測図

（2）昭和時代の遺構と遺物

第1号防空壕（第16図 図版3）

本遺構は発掘調査地区のほぼ中央部付近、第5号トレンチ内で検出され、その周辺を拡張してプラン確認をした。南北1m90cm位、東西7m20cm位を測り、四隅がやや丸味を呈する隅丸長方形状を成している竪穴状遺構である。

壁高は70～80cm位を数える。壁面上部は垂直に近いが、同面中央部から下部にかけてやや外

傾き味を成す。同面の組成土は上部はソフテフラ層、中部から下部にかけてハードテフラ層であった。従ってその状態は極めて固く、良好であり、掘る際に使用した道具の痕跡が顕著であった。

床面は大般水平であったが、空襲訓練を常時実施したとみえて極めて堅く踏み固められていた。

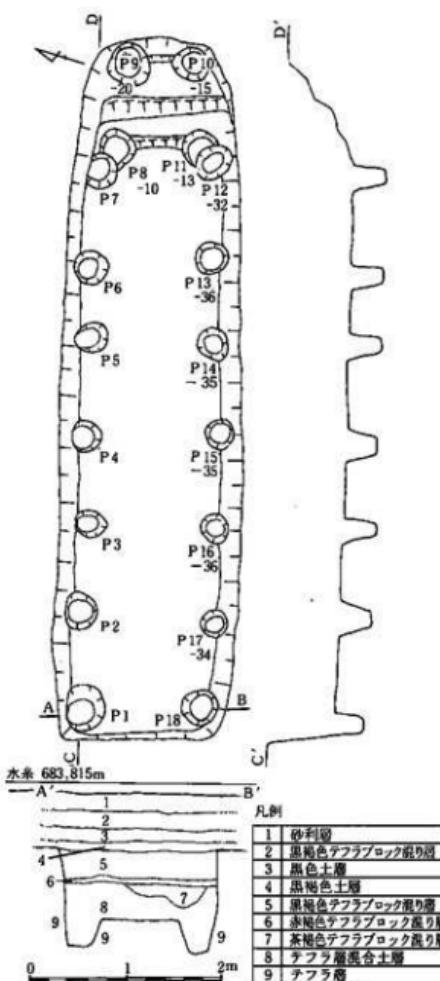
覆土はテフラ層のブロック混入が顕著であり、搅乱土層の意味あいが強かった当初の段階では何の造構かは判断できなかったが、調査を進めていく段階で、ある書物が目にとまつた。それは『長野県伊那弥生ヶ丘高等学校80周年史』であった。これによれば昭和20年9月にこの塹を一挙に埋めたと紙上を飾り、太平洋戦争時同校寄宿舎を利用していた生徒達の防空壕として利用されていた事実が刻明に書かれていた。以上の点からして搅乱土は極めて固く踏まれた事が実証できた。

東壁には中段が完備され、出入りに利用したと思われる。柱穴は底面南側7本北側に7本とそれぞれ整然と配されている。出入口と思われる上段には2本の柱穴が穿けられているが、底状の構築物が出ていたのであろう。

柱穴を巧みに利用して防空壕の上部に屋根を架け、その上に土を盛ってカモフラージュしたと考えられる。

遺物（図版8）

本遺構内より出土した遺物の名称とその数を記すと次のようになる。
 砥2ヶ 絵具角皿1ヶ
 一錢銭1枚 染付御飯茶碗1ヶ 青緑釉御飯茶碗1ヶ 九谷焼盃1ヶ 鉄片2ヶ 電燈の笠1ヶ 椅3本 アルミ製の杓子1ヶ 歯ブラシの柄1本（ブラシの部分は全て欠損している）
 クリーム瓶2ヶ インク瓶4ヶ 醬油差し1ヶ



第16図 第1号防空壕実測図

第2号防空壕（第17図 図版3）

発掘調査地区の南東端部、第1号トレーナーの拡張部分に検出された竪穴式防空壕で、表土面より90cm位下ったソフトテフラ層面を55cm～60cm位掘り込んで造っており、その規模は南北1m75cm位、東西6m40cm位を測る。平面プランは四隅が丸味状を呈する隅丸長方形状を成す。

壁面南側は垂直に近く、北側は外傾傾斜を、西側はやや凹凸を、中段はコブ状をそれぞれ形造していた。同面は大部分がハードテフラ層に含まれており、極めて良好であった。

覆土はテフラを混入した搅乱土層より成り立っており、上層面は固く踏みかためて人為的痕跡がうかがえた。細部にわたっての事柄は第1号防空壕と極めて類似しており、構築年代は二つともほぼ同一時期と察せられる。

床面は大般平坦で、堅く踏み固められた痕跡が極めて明瞭であり、第1号防空壕同様に空襲訓練が常時実施されたことを物語ってくれる。

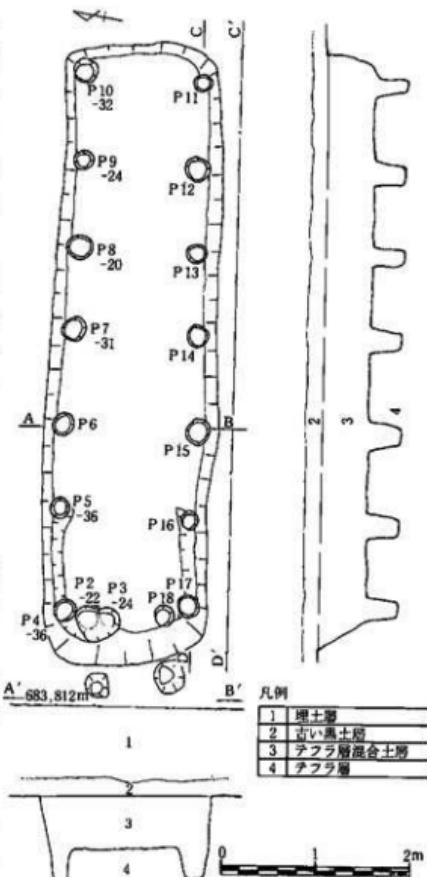
北壁、南壁直下の床面土には等間隔で2本の柱穴が配列されている。この工法は上に屋根を架け、その上に土を盛るためにの最低限の造作であったのだろう。

遺物 注ぎ口の付いた醤油差しが1点出土した。第1号防空壕に比較して遺物の出土が少ないのは寄宿舎との位置関係を考えてみる必要があろう。つまり、空襲時に気の身、気のままでこの壕にとび込んだのであろう。

（飯塚政美）

寄宿舎廃絶時のゴミ捨場（図版4）

第2号防空壕の東壁付近を精査していると、表土面から60cm位下った面に厚さ10cm位で搅乱土が堆積していた。搅乱土層下にゴミ捨場が発見され、その厚さは70cm位、幅は1m20cm位の規模であった。このゴミ捨場を断面から見ることになったわけであるが、あたかも貝塚で貝層



第17図 第2号防空壕実測図

と土器層とが完全に分離してみられるように、生活必需品層と搅乱土層が明確であった。

昭和32年伊那弥生ヶ丘高等学校寄宿舎が廃舎となり、その時に一挙に寮生の使用していた日常生活必需品を整理するがごとく一撲に埋めたゴミ捨場であったと思われる。このゴミ捨場から我々は多くの磁器類を探集し、調査してみると明治のものも若干はあるが、大部分は大正から昭和時代のものであり、まさに、この遺物からしてここでよく学び、よく遊んだ生徒達の青春の歴史が掘り起こされた。

ゴミ捨場より採集した磁器類のうち、美濃産と瀬戸産が大部分であった。当時、極めて高価であった九谷産もあり、両親が入学祝いとして寄宿する娘に買ってあげたのであろう。

遺物（口絵2～8 図版6～7）

本造構内より出土した遺物の種類を記す。クリーム瓶 インク瓶 薬瓶（目薬 神薬 オキシール瓶） 醬油差し

その他、施釉磁器、施釉陶器については口絵（2～8）の1番から54番を照合して調査研究を実施して下さい。

1は磁器の筒形茶碗、削出高台、口径6.7cm、器高6.6cmを測る。器面には染付による絵が施されている。産地は美濃と考えられる。時期は明治末から大正時代のものである。2は磁器の丸碗である。削出高台、口径7.5cm、器高4.9cm、器面には赤絵の牡丹が書かれている。底部には九谷の銘が見られる。時期は大正～昭和初期にかけてである。3は筒茶碗、削り出し高台面には九谷の銘が書かれている。口径6.5cm、高さ6.6cmを測る。器面には色絵の雁が書かれている。年代は大正～昭和初期にかけてのものである。

4は磁器の筒茶碗である。口径6.3cm、高さ6.0cmを測り、削出高台を持つ。器面は銅線繪が施され、「伊那旭町薬種商小池常彌」の銘が書かれている。時期は大正末から昭和初期頃。5は磁器の染付煎茶碗である。口径7.1cm、高さ4.3cm、口縁が外反している。器面には手書の染付文が施されている。産地は美濃焼である。時期は明治末より大正年代である。6はゴム印の煎茶碗、口径8.1cm、器高4.4cm、染付による施文がなされている。美濃焼で大正から昭和初期頃の作品である。7はゴム印の染付煎茶碗、口径8.2cm、器高4.6cm、削り出し高台である。美濃焼で時期は大正年代から昭和初年である。8はゴム印による染付煎茶碗、口径8.1cm、器高4.3cmを測る。削り出し高台。産地は美濃、時代は大正から昭和初年頃。9はゴム印の染付煎茶碗、口径8.2cm、器高4.7cm、産地は美濃、時期は大正～昭和初頭。10はゴム印の染付煎茶碗、口径8.1cm、器高4.5cm、年代は大正中葉から昭和初年頃である。

11はゴム印染付煎茶碗、削り出し高台で、口径8.3cm、器高4.3cmを測る。産地は美濃、時期は大正～昭和初期。12は磁器の赤絵煎茶碗、削り出し高台で、底部に「九谷」の銘が記されている。口径7.8cm、器高4.5cmを測り、時期は大正～昭和初期と考えられる。13はゴム印の染付煎茶碗、削り出し高台、口径8.1cm、器高4.3cm、施文は桜の花文様、産地は美濃、時代は大正初期～昭和初年。

14はゴム印染付の煎茶碗、口径8.2cm、器高4.4cmを測る。産地は美濃、時代は大正～昭和初年頃。15は染付の煎茶碗、削り出し高台、口径7.8cm、器高4.3cm、一部色付がなされている。16は染付の煎茶碗、削り出し高台、口径7.8cm、器高4.2cmを測る。産地は美濃、時代は大正初年～昭和初年頃。17はゴム印の染付煎茶碗、口径8.2cm、器高4.6cmを測る。産地は美濃、時代は大正～昭和初年の作。

18はゴム印の染付煎茶碗、口径7.8cm、器高4.2cmを測る。産地は美濃、時代は大正～昭和初期にかけてである。19はゴム印による磁器の染付煎茶碗、口径7.4cm、器高4.7cm、産地は不明、時代は大正～昭和。20はゴム印の染付煎茶碗、口径8.3cm、器高4.5cm、産地は美濃、時代は大正～昭和初期。21は磁器の染付杯である。削り出し高台の脇に「伊那町立重盛醤油店」の銘が書かれている。産地は不明、時代は大正から昭和初年頃と考えられる。

22は鉢形青磁碗、口径10.8cm、高さ6.2cm、産地は不明、戦前頃の作。23は磁器の鉢蓋、手書きの染付、口径13cm、高さ4cmを測る。産地は美濃、時期は大正～昭和初年。24は染付の鉢、削出高台、口径約14cm、器高8.7cmを測る。産地は美濃と考えられる。時期は昭和初期。25は菊花文の青磁の蓋、口径11.3cm、器高3.2cm、ツマミ付、産地は不明、時期は大正～昭和初年。26は青磁の蓋、削り出しのツマミ、口径12.8cm、器高3cmを測る。産地は不明、時期は大正～昭和初期。

27は磁器の染付の蓋、口径11.2cm、高さ2.4cmを測る。産地は美濃、時期は大正～昭和。28は型押の磁器の蓋、長径10.9cm、短形2.6cmの楕円形で、産地は不明、時期は昭和初期か。29はゴム印の染付皿で、削り出し高台である。口径10.8cm、器高2.2cm、美濃焼、大正～昭和。30は白呉須、白銅板の碗である。産地は美濃、時期は昭和初頭と考えられる。31は染付削り出し高台の磁器の碗である。口径10.7cm、器高5.4cm、産地は美濃、時期は大正～昭和初年。32はゴム印の染付、削り出し高台の磁器の碗である。口径11.3cm、器高6.3cm、産地は美濃、時期は大正～昭和初期。33はゴム印縁に鉄軸が施された染付の碗、高台内に「陶峰園典市製」と書れた銘が見られる。口径10.4cm、器高5.6cmを測る。産地は瀬戸、時期は大正末～昭和初年。

34は染付の碗、口縁内面にも染付が見られる。口径11.2cm、器高5.8cmと高い。産地は美濃、時期は大正中葉～昭和初年。35はゴム印の染付碗である。口径11cm、器高6.1cm。産地は美濃、年代は大正～昭和初年。36は手書きの染付碗、口径10.9cm、器高5.8cmと高い方である。産地は美濃、時期は大正末～昭和初年。37はゴム印の染付碗、口径は10.8cm、器高5.9cmと高い方。産地は美濃、時期は大正～昭和初期。38は染付、削り出し高台の碗である。口径10.6cm、器高5.6cmを測る。産地は瀬戸、時期は大正～昭和初年頃。

39はゴム印の染付碗である。口径10.1cm、器高4.8cm、産地は美濃、時期は大正～昭和前期。40はゴム印の染付碗、口径11cm、器高6.2cmと高い。産地は美濃、時期は大正～昭和初年頃。41はゴム印の染付碗、口径11.1cm、器高6cmと高い。産地は美濃、時期は大正～昭和初年。42は鉄軸締掛けの磁器碗である。口径11.2cm、器高5.6cm、産地は不明、時期は昭和初期。

43は緑釉総掛け碗、口径9cm、器高5.2cmを測る。産地は不明である。時期は昭和初年と考えられる。44はゴム版の染付碗、口径11cm、器高6.2cmと高い方、産地は瀬戸か、時期は大正～昭和初年頃。45はゴム版の磁器碗、器面には染付と赤絵の文様が書かれている。産地は明らかでない。時期は昭和頃と考えられる。46はゴム印の型押碗、器には赤絵が書かれている。口径11.0cm、器高5.9cmを測る。産地は明らかでなく、時期は大正～昭和初年頃。47は青磁の小鉢である。削り出し高台、内面に「伊那町一ウチダ薬舗」の銘がある。

48は青磁の長皿である。内面にエビが刻されている。長径17.2cm、短径10.3cm、高さ2.5cmを測る。49は染付の磁器で、醤油差し、口径4.1cm、器6.5cm、把手を欠く、産地は不明、時期は大正～昭和初期。50は灰釉陶器の鉢、口径約21cm、産地は不明、時期は大正～昭和初期頃。51は灰釉陶器片口鉢、口径19cm、器高9.4cm、削り出し高台、腰部に晴釉が施されている。52は長石釉が施された甕の破片である。長石釉から高遠焼と考えられ、時期は大正年代と思われる。53は鉄釉の鉢、口径は約12cm、器高は6.4cmを測る。産地は不明、時期は大正～昭和初年頃と考えられる。54はゴム印の染付の皿である。削り出し高台、口径13cm、器高2.3cm、産地は美濃、時期は大正～昭和初年頃。

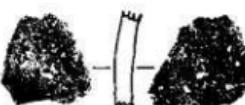
(友野良一)

(3) その他の遺物

第18図の土器片は第5号トレンチの最東部付近で、テフラ層より若干上層面で出土した。無文地に無雜作に刺突文を押捺してある。赤茶褐色を呈し、多量の雲母と石英、纖維を含み、焼成は中位である。以上、前述した諸特徴より縄文早期末葉茅山上層式に属していると思われる。

第19図(1～2)は茅山上層式土器片を出土した近くより検出され、ともに黒曜石製の鎌である。(1)は脚が弯曲気味を呈し、右上端部が欠損している。(2)は先端部、右下端部がわずかに欠損しているが、全般的にみて、三角形鎌に含まれるであろう。(1～2)ともに剝離調整が見事である。

(板塚政美)



第18図 土器拓影(1:3)



第19図 石鎌実測図(1:2)

第Ⅳ章 所 見

今回の長野県伊那弥生ヶ丘高等学校体育馆改築に伴う発掘調査において明らかになった成果について述べておく。

この上ノ山遺跡は過去2回にわたって発掘調査が実施され、それぞれ報告書が刊行されている。これらの報告書を記しておく。第一次調査は樋口貞幸氏が「信濃考古25号」に、第二次調査は「長野県伊那弥生ヶ丘高等学校合宿所建設事業上ノ山遺跡－平成5年3月発行」に詳細に報告されているので、この報告書と比較検討を加えてみる必要性があろう。

今回の調査は同校敷地内の北西端に位置し、当初より遺跡存在の可能性は低いと考えられていた。実際に調査に取りかかってみると、過去の土地造成によって埋土や擾乱土が厚く堆積しており、調査に難航をきわめた。埋土や擾乱土を取り除いてテフラ層上面まで掘り下げていくと、想像もしていなかった近世から昭和時代の遺構・遺物が検出され、近年、脚光を浴びだした近世考古学、近代考古学、現代考古学の一助となるであろう。

発掘調査地で溝状の落ち込みが見られた。これは後で分かったことであるが、かの有名な原田井の流末を利用した水田への引水溝と近くの住民が知らせてくれた。調査段階では単に溝とか簡単に判断してしまったが、今になって反省させられた。

第1号柱穴群は調査地のはば中央部付近に検出され、その広がりは178m²に達していた。この範囲の中に3グループの掘立建物址の存在が⁵、柱穴の配列からみて確認された。第1号掘立建物址は桁行9m、梁間4.5m、面積40.5m²。第2号掘立建物址は桁行5.6m、梁間4.7m、面積26.5m²。第3号掘立建物址は南北9.1m、東西2.9mと狭かった。この柱穴群は数多くの方形の柱穴より成り立っていたが、東柱の穴も数多く存在していた。遺物の出土は極めて少なく、わずかに江戸時代中期頃と推定される菊皿陶器1片と、同期頃と推定される灰釉陶器1片の計2点が出土したのみであった。

第2号柱穴群は調査地の最東端に検出され、南北の桁行3.6m、東西の梁間2.7m、面積9.7m²を測る小規模の掘立建物址であった。第1号柱穴群、第2号柱穴群はともに共通することであるが、柱は掘立柱状を呈し、一般的には高床式、平床式の建物と考えられ、江戸時代中期頃の遺構と考えられる。近くの郷土史家の意見を組み入れてみると「郷倉」的建造物が存在していたのではないか。いづれにしろ、周辺地域に現存する古文書類、小字名をさらに綿密に研究していくかなければならない。今後、絵図の発見を大いに期待するものである。

第1号防空壕は第1号柱穴群内的一角に検出され、南北1m90cm位、東西7m20cm位の規模で、隅丸長方形を呈する竪穴式遺構である。第2号防空壕は調査地の最東端に検出され、南北1m75cm位、東西6m40cm位の規模を有し。隅丸長方形平面プランを呈し竪穴式に掘り込んでいた。前述した2つの防空壕は形態が酷似しており、また、柱穴の配列からみて、同時

期に一定の規格を持って振り上げたのであろう。調査の段階で本遺構の究明に苦労したが、これを利用した生証人が現われ、安堵したものであった。人間の営みの中で半世紀経過すれば忘れ去られていく歴史の裏舞台があったことをこの事例を通して考えていただきたい。たまたま、平成7年度は太平洋戦争終決からちょうど50周年に当たるので、各種のイベントが計画されているが、この資料も展示の中に加えてみることも必要であろう。余談ではあるが、伊那市内で横穴式防空壕や、旧伊那飛行場格納庫等々、太平洋戦争当時の遺構が現存しており、今後、この保存方法も考えていかなければならない。

寄宿舎廃絶時のゴミ捨場は調査地区の最東端の一隅に検出され、厚さ70cm位、幅1m20cm位の規模を成していた。その状態は生活必需品層と擾乱土層が明確であった。昭和32年伊那弥生ヶ丘高等学校寄宿舎がその墓を閉じたが、開舎から閉舎までの生活の動きが、出土した生活必需品や、陶磁器類から理解できた。

ゴミ捨場より出土した陶磁器類は約1500点に及んだが、その内、主なもの54点を口絵にカラーで掲載した。これらの大部分が大正時代から昭和時代のものであり、ほんのわずかに明治時代のも含まれていた。产地は8割方が美濃産であり、陶磁器の流通形態変遷史の研究に役立つと思われる。器種は茶碗類が主流を占め、それに混じって碗、杯、鉢の蓋、小鉢、長皿、醤油差し、鉢、片口鉢、甕等々多種多様であった。施釉、施文方法を記すと次のようになる。ゴム印の染付、赤絵、銅緑釉、手書の染付、青磁、ゴム印の型押し、白呉須、白銅、鉄釉、緑釉、灰釉、長石釉、これら陶磁類の中に高速焼1点が含まれているのは興味深い問題を投げかけてくれる。陶磁器の鑑定については多治見文化財保護センター学芸員田口昭二氏に依頼しました。長年の研究に基づいての貴重な御意見を頂き、心より深く感謝申し上げ、紙上にて御礼に変えさせて頂きます。

終わりに、長野県伊那弥生ヶ丘高等学校の島田校長、職員の方々にはいろいろと、ご指導、ご協力を賜わり、厚く御礼申し上げる次第であります。

(友野良一 飯塚政美)

図 版

図版1 発掘調査状況



第5号トレンチ全景（上） 第8号トレンチ全景（下）



第1号柱穴群（上） 第2号柱穴群（下）

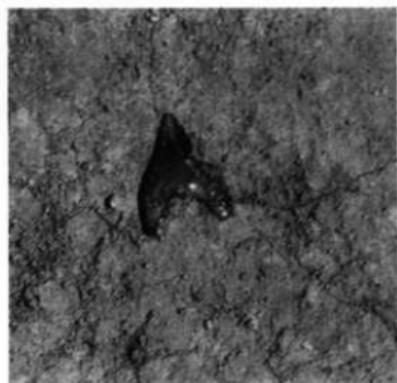


第1号防空塔（上） 第2号防空塔（下）

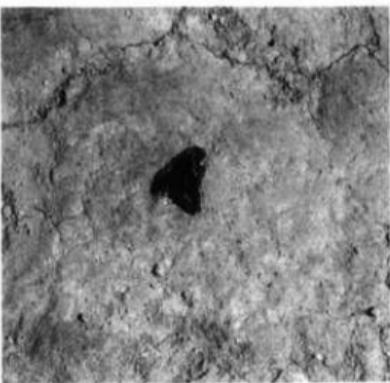
図版4 逮捕及び記念撮影



ゴミ捨場（上） 記念撮影（下）



1



2



3



4

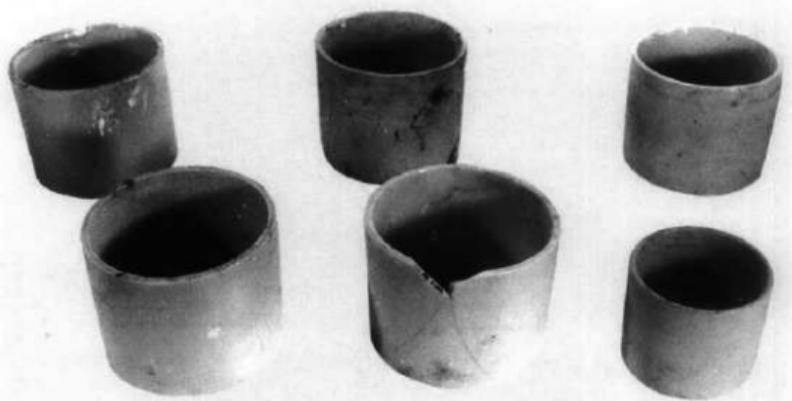


5



6

1~2 石器 3 舟文土器（茅山上層式）（4~5）近世陶器 6 一錢



陶器（ゴミ捨場出土）上 クリーム瓶（ゴミ捨場出土）下



インク瓶（ゴミ捨場出土）上 茶瓶（ゴミ捨場出土）下



醤油差し（ゴミ捨場出土）



湯呑茶碗（ゴミ捨場出土）



櫛（第1号防空壕出土）



穂（第1号防空壕出土）



絵具角皿（第1号防空壕出土）



一錢（第1号防空壕出土）

報告書抄録

ふりがな	うえのやまいせき							
書名	上ノ山遺跡							
副書名	長野県伊那市弥生ヶ丘高等学校体育館改築							
卷次								
シリーズ名	埋蔵文化財緊急発掘調査報告書							
シリーズ番号								
編著者名	友野良一・飯塚政美							
編集機関	伊那市教育委員会							
所在地	〒396 長野県伊那市大字伊那部3050 TEL0265-78-4111							
発行年月日	西暦1995年3月20日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
うえのやま 上ノ山	ながのけん いなし 長野県伊那市 にしまちく いなべ 西町区伊那部	68	2373	35°50'8" 57' 10'	137° 57' 10'	平成6年 8月8日～ 平成6年 9月14日	2,000	長野県伊那 市弥生ヶ丘高 等学校体育 館改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上ノ山		江戸時代 明治時代 大正時代 昭和時代	近世柱穴群 竪穴防空壕（2基） 寄宿舎廢絶時のゴミ 捨場	・茅山式土器 ・江戸時代陶器 ・明治時代・大正時代・昭和時代の磁器・陶器 ・绳文時代の石器	・近世柱穴群は郷倉の跡か ・竪穴防空壕2基は寄宿舎の生徒達が使用していた			

上ノ山遺跡

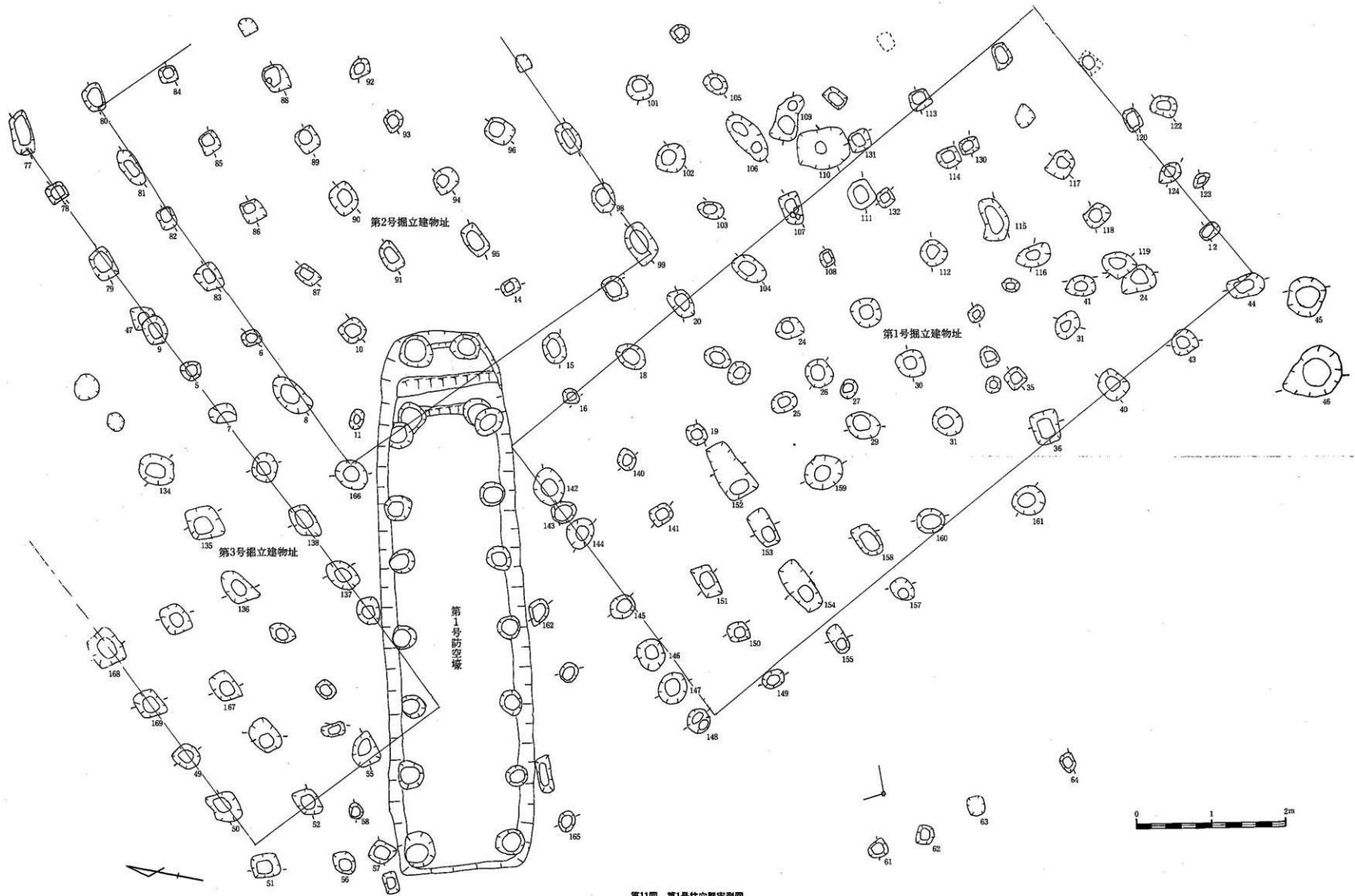
—埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書—

平成7年3月17日 印刷

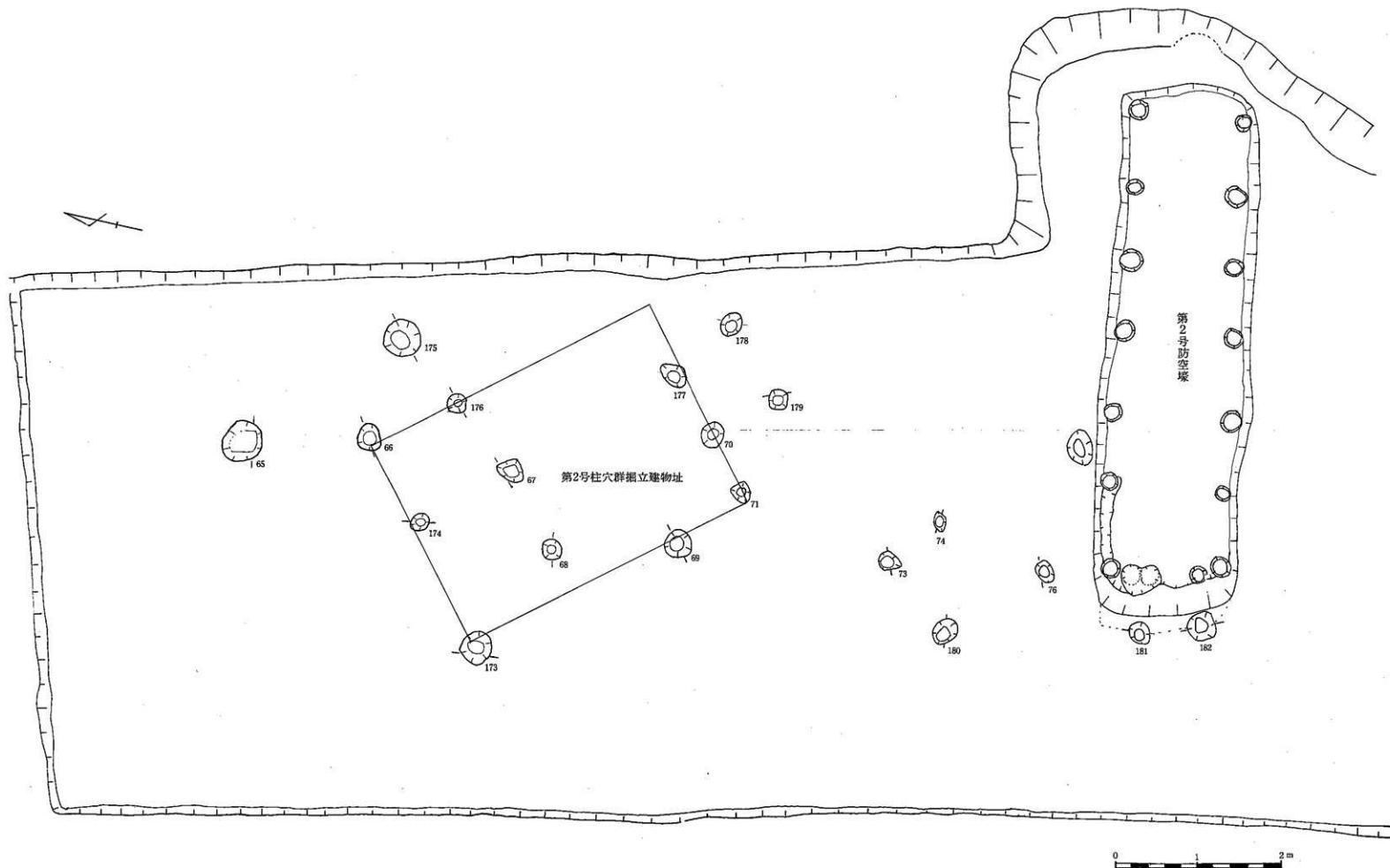
平成7年3月20日 発行

発行所 長野県伊那弥生ヶ丘高等学校
伊那市教育委員会

印刷 小松総合印刷所



第11図 第1号柱穴群実測図



第14圖 第2号柱穴群実測図

